

都道府県別賞一等

今後の生命保険

福岡県 福岡市立梅林中学校 一学年

小田 慶二

今年、ぼくのおばあちゃんが七十八歳の誕生日をむかえた。健康的な毎日を過ごすおばあちゃんに、ぼくはつい甘えてしまう。そんなおばあちゃんが病气やケガ、事故にあった場合、ぼくはどう対応すれば良いのかを考えてみたが、なかなか難しい。そのとき、ぼくは生命保険を思いついた。

『ぼくたちは生命保険に入った方が良いのだろうか。』

そんなことを考えながら、ぼくは生命保険について調べてみることにした。

ぼくが考えていた生命保険は単純で、「月に何千円かを支払って、その支払った分のお金が、いざというときに返ってくる。」というようなものだ。しかし、調べていくうちに、「こんな仕組みになっているんだ。」と、驚く情報がいくつもあつた。まず一つ目は、自分が支払ったお金を受け取るのではなく、保険に入っているたくさんの人たちから集めたお金を受け取るということだ。ぼくは今まで、「銀行に預けているお金や保険会社に支払ってきたお金を使えば大丈夫だろう。」と考えていた。しかし、何十万円、何百万円にもなると、さすがに辛い。そのとき、みんなが支払ってくれたお金から払ってもらえるのだ。二つ目は、今まで支払ってきたお金が、自分に返ってこない場合があるということだ。では、今まで支払ってきたお金はどこに行くのかというと、保険に入っている人が事故などにより、多くのお金を必要とする場合にその人を助けるために使われるのだ。

「生命保険に入っている人は、困っている人を助け、自分が困ったときに助けてもらおう。」このような仕組みは、助ける人と助けられる人とのやり取りを保険会社が手伝ってくれているようなものだ。ぼくは思った。このような役割をしてくれる施設は他にもある。たとえば、ケガや病気のときに手助けをしてくれる病院。火事が起きたときに助けてくれる消防。事件や事故などにあつたときに助けてくれる警察だ。このような施設があるからこそ安心して日々を送ることができると思う。しかし、人は楽な方に行きすぎだと思う。昔はそんな施設が無かつたから、周りの人と助け合っていただろう。そのおかげで、周りの人との関わりが良くなっていたのである。では、保険に入っている人がお互いに助け合っているのは良いが、お互いの顔を知っているだろうか。自分が支払ったお金が誰の手に渡り、そのお金がどのように使われたのが分かれば、「自分は今、困っている人を助けたんだ。」と、実感できるのかもしれない。

## 第54回中学生作文コンクール

でも、実感が無い。今でも、実は自分が助けることができているなら、うれしいことだ。

『ぼくたちは生命保険に入った方が良いのだろうか。』

この問いの答えはないと思う。自分の考えで決めるのだ。しかし、現在日本には生命保険に入っている人が九割程度もいる。このことから、日本の人々にとつて、生命保険は人生に無くてはならない存在だということは分かる。命はたった一つしかなく、お金に代えられないものだ。生命保険は、人々の今後の暮らしを支える働きがある。人々の今後の暮らしを支え、人々と深い関わりを持つことができる生命保険ができれば、相手を尊敬する心を持ち、世の中から戦争や犯罪を減らしていくことができると思う。現在の生命保険は、もつと進化することができる。